

グイとガナの民族生殖理論と父性

今村 薫

The folk-interpretation of human reproduction among | Gui and || Gana and its implications for father-child relations

Kaoru Imamura

ABSTRACT

| Gui and || Gana people often have extra-marital relationships with lovers with implicit understanding, and this type of relationship is called “*zaa-ku*”. According to their folk-interpretation of human reproduction, a child born under “*zaa-ku*” is considered to be made from mixed semen, accumulated eventually by not only the lover but also the husband. So the child is thought to get life from both of them.

Though the lover is genetically physiological father, the husband can be specified as not only the pater but also the genitor. On their notion of conception, it is not necessary for a genitor to be only one person. Therefore, the husband can be considered to have complete paternity for the child of his wife, whoever is the physiological father.

はじめに

アフリカのカラハリ砂漠に住む狩猟採集民グイ/ガナ⁽¹⁾は、ザークという婚外性関係を持つことが知られている (Tanaka, 1989)。別のサン集団であるクンについては、婚外性関係は非常にまれであると多くの研究者から指摘されてきた。

「! Kung of Nyae Nyae」 という本の中で、Marshall は「クンの社会は、婚外のいかなる性関係も禁じられている」と述べている (Marshall, 1976, p. 279)。彼女は、クン社会で婚外性交渉の実現を著しく制限している要因として、プライバシーの欠如をあげている。「(彼らの社会では) 秘密の保持が不可能であるので、婚外性関係も成り立たない」、なぜならば、「彼らは

すべての人々の足跡を記憶しており、砂の上についた足跡から、誰がいつ、どこへ行ったのか読みとる」(前掲書, p. 280) からである。つまり、クンにとって婚外性関係は社会的な禁止事項であり、この禁止を破るには当事者が秘密を保持し続けるしかない。しかし、同時に彼らの社会では、隠し事はもつとも反社会的な行為であり、現実に隠し事をできない状況にある。また、インセスト・タブーを拡張的に適用していることも、婚外の性関係を不可能にしている原因であるという。クンの人口統計学を研究した Howell も、「クンの間では、結婚外の出産はほとんどない」(Howell, 1979, p. 264) と述べている。

Shostak は、クンの女性の生活史を膨大な聞き取りによって明らかにし、「ニサ：カラハリの

女の物語(邦題)」という一冊の本にまとめた。Shostak は、クンの女性は、結婚していても愛人を持つことがあると書いているが、しかし、「実際には、婚外の性的な出会いはまれである。なぜならば、クンの生活にはプライバシーがないからである」(Shostak, 1981, p. 268) と、Marshall の結論にしたがっている。これらの研究は、一貫してクンの社会では結婚以外の性的関係は、社会的に禁じられたものであると主張している。

一方、グイ/ガナのザーク関係は、社会的に承認されたものであり、その点で、他の社会にみられる「不倫」一般とは異なる。グイ/ガナのザーク関係については、複数の夫婦と家族を結び付ける社会的な機能を持っていると、これまで指摘されてきた。「[愛人関係]および、頻繁な離婚と再婚がつくりだす錯綜したネットワークが多数の核家族を結び付ける働きをしている」(Tanaka, 1989)。「[性]を媒介にした関係が、離合集散的な社会において高次の集团的統合に寄与している」(菅原, 1993, p. 250)。

ザーク関係は、社会的に承認され、ある程度「制度化された」ものである。とはいえ、アフリカの牧畜民社会にみられるような「完全に制度によって保障された婚外婚」でもない。たとえば、北ケニアに住むラクダ遊牧民レンディーレは、既婚者の愛人関係を制度的に認めている。佐藤(1992)の著書から以下に抜粋する。

女性は、結婚すると未婚時代の性的抑圧から解放されて、かなり自由な性生活を送ることが許されている。婦人は、一定の社会関係上の制約を遵守すれば、夫以外の男性と性的交渉を持ち、子供を生んだとしても、この行為は当事者間に個人的しこりを残すことはあっても、姦通とはみなされず、

社会的制裁の対象にはならない。婦人は、夫の死後も子供を生みつづけることができ、そうして生まれた子供は亡夫の子供として社会的に認知される。

既婚者の愛人関係は「デュマシ」関係として形式化されている。「デュマシ」という関係用語は、本来、男性からみて、妻の姉妹や長兄の妻にたいして使用される姻戚関係用語である。(佐藤, 1992, p. 68)

レンディーレは、厳格な性年齢体系に応じた年齢組を社会構造の柱としている。このような社会では、婚姻システムの外にはずれた性関係を、特定の年齢組間の「デュマシ関係」に限定することによって、再び制度の内に取り込むことに成功している。

グイ/ガナのザーク関係は、個人の持つ恋愛感情を基本にして築かれる関係でありながら、最終的にその個人的関係を社会化している。グイ/ガナの文化は、個人間の関係を集団で共有して認めてしまうしなやかさを蓄えているのである。また、安定的なザーク関係を一つの理想型とする社会通念もザークを支える背景にある。

この論文⁽²⁾では、グイ/ガナが婚外の性交渉をどう考えているのか、ザークによって生じる問題を解決するためにどのような儀礼をおこなうのか、といった彼らの性意識と性によって結びつけられる社会関係の形成過程を明らかにする。また、既婚女性がザークにおいて妊娠した場合の子どもの「父親」を人々は誰と認知し、その父親はどのように子どもに接するかというグイ/ガナの父性のあり方を、彼らの民族生殖理論と照らし合わせることによって考察したい。

シエク（結婚）

グイ/ガナ語では結婚することをシエクという。シエクとは「取る」という意味が原型で、「男が女を取る」「女が男を取る」ことが結婚することである。また、相互性をあらわす接尾辞クをつけたシエクは、「男女が互いに取り合っている」、すなわち結婚している状態をあらわす。

彼らの社会では、男性側が女性側になんらかの婚資を支払うことが期待されてはいるが、必ずしも守られていない場合が多い。また、結婚や離婚によって所有権が移動する財産もない。結婚にさいして儀礼をおこなうが、結婚の儀礼に人々を招き、披露宴をおこなうということもない。近隣の農牧民カラハリのように、首長に結婚を登録するというものもない。したがって、彼らの結婚を形式の上で厳密に定義することはむずかしい。しかし、実態としての結婚はまちがいに存在し、社会的にも認知されている。男女が同じ小屋に住み、性的関係を持ち続け、食物の分配などによって生計をともにし、子どもの養育をともにおこなっているという状態は、誰もが「彼らは結婚している」と認めているという点で、「典型的な結婚」といえよう。

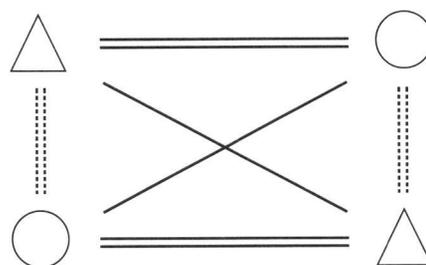
しかし、別居していても、頻繁な訪問や分配によって結婚している例、逆に同じキャンプで暮らし、男性が女性の小屋を訪れ、食物分配などがおこなわれていても結婚しているか否かは当事者でさえ曖昧であることもある。このように、「典型的な結婚」の周辺にはさまざまな形の性を媒介にした男女の結びつきがある。

ザーク（婚外性関係）

結婚していない男女の性関係の一つにザークがある。この単語は、「恋人にする」という意味

の動詞ザーに、相互性をあらわす接尾辞クをつけたものである。ザーク関係にある男性、女性は、動詞ザーに性をあらわす接尾辞ビ、あるいはシをつけてザービ、ザーシという。ザークは婚外の性交渉が特定の男女間である程度持続的に繰り返される状態やその男女の関係を意味する。今日、ザークという言葉は、若い男女の恋愛、結婚している男女が愛人を持つこと、また、カラハリなどの異民族との間の恋愛など、グイ/ガナが結婚と見なすもの以外の性関係すべてに意味を拡張して使われる傾向がある。また、性関係がない「親しい友人関係」をも、ザークと言い表すことがある。

しかし、誰もがそれをザークと見なす「典型的なザーク」とは、「結婚している男性あるいは女性が、配偶者の同意を得て、他の異性と性的関係を持つこと」である。ここで重要なのは、典型的なザークとは、配偶者の同意を得たかなりオープンな関係であることである。配偶者の



====	<i>Sie-ku</i>
.....	<i>Zaã-ku</i>
—	<i>! naa-ku</i>

図1 ザークの説明

同意を得た場合、男性同士、あるいは、女性同士は「ナーク（同意し合った仲）」といわれる（図1）。

大きなザーク

彼らがザークの理想的な形態と見なすものは、2組の夫婦が互いのパートナーを交換する、いわゆる夫婦交換である。彼らはこの形態を「大きなザーク」あるいは「小屋を分け合う」と言い表す。「大きなザーク」では、2組以上の夫婦が、食物も性も共有し合って核家族を越えた緊密な共同体を形成する。彼らが伝統的な遊動生活を送っていたころの生活の聞き取りによると、2組の夫婦が互いに同意して「大きなザーク」関係を結ぶんだことが実際に数例あった。

さらに、3組の夫婦が「大きなザーク」関係にあったことが明らかになった。グイ/ガナは、もともと年を数えない人達なので、彼らの年齢

や、ある出来事の起きた年代をはっきり特定することは非常にむずかしい。しかし、相対的な年齢順や、いくつかのエポック・メイキング⁽³⁾によって、年齢推定をおこなうという作業を私たちはおこなってきた。ザークによって生まれたという子どもたちの年齢推定から、彼ら3組の夫婦のザークは、およそ1967年から1971年までの5年間続いたと考えられる（図2）。3組の夫婦の内訳は、2人の妻を持つ男性1人と、一夫一妻のカップル2組の合計7人である。Xと2人の妻(OとGk)はグイ、GSとQ夫妻もグイである。NとA夫妻はガナである。当時、彼らは別々の土地に住んでいて、XとGSのキャンプは50kmほど、XとNのキャンプは150kmちかく離れていた。男たちがそれぞれのキャンプを訪問し合い、肉や食糧、タバコなどの嗜好品などを分け合ったという。そのような共同生活の一環として性交渉もあり、複数の父親から子どもが生まれた。ザークは男女の二

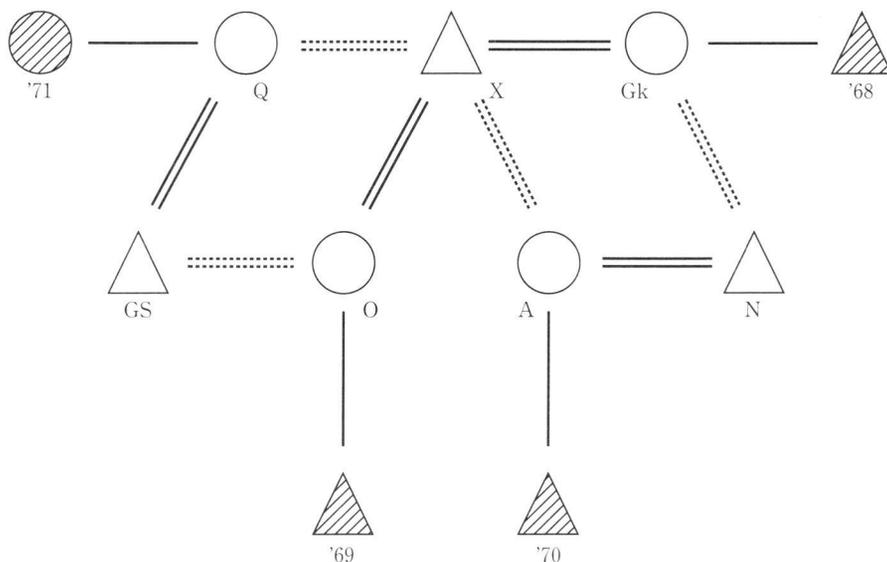


図2 7人での「大きなザーク」の例
白抜きは大人、斜線はザークで生まれた子どもを表す。
数字は、その子どもの生まれた推定西暦年。

者間の関係だけでなく、このような「小屋を分け合う」関係の男性同士、女性同士にも使う。また、この7人のザークについての聞き取りでは、「われわれ7人はザークだった」という表現をしばしば耳にした。ザークとは、性を媒介にして関連する人々全体を示す言葉でもあるのである。

汚れの儀礼

前述の7人でのザークが始まったときに、年長者の進言で、彼らは「汚れの儀礼」を行った。「汚れ」は、グイ/ガナ語でツォリといい、彼らの疾病観の中核をなすものである。ツォリは体表の垢や、手に付いた諸々の汚れなど、前に見える物質を指すこともあるが、病人や、正しくない行いや強い欲望を抱いた人の体内に潜む目に見えないものも意味する。ツォリは、性交によって男女の間に広がるものであり、「性病」はツォリによるものと説明される。しかし、ツォリは、近代医学でいう「病原体」と同一のものではない。彼らの疾病観の詳細は、すでに別稿（今村、1998）で論じたが、以下のように概略を述べる。

ツォリとは、一人で発症する病気ではなく、人と人とのつながりの中に存在するものである。親子、キョウダイ、夫婦、愛人関係などのなんらかの関係がある人々には、その関係の根拠になる物質が身体に蓄積されているとグイ/ガナは考える。その物質とは、血液や精液などの身体物質である。この物質のことを、ここでは便宜上「つながり物質」と呼んでおくことにする。「つながり物質」は人々の関係がうまくいっているときは、何の問題もおこさないが、嫉妬、憎悪、欲望などによって、いったん人間関係に問題が生じると、とたんに全員の「つな

がり物質」が「ツォリを帯びた状態」になり、関係者全員が病気になる。これは、病人から健康な人へと一方向的に徐々に広がっていくのではなく、「つながっている」関係者全体が同時にツォリを「共有」するのである。

彼らは性行為がそのまま「ツォリで汚れた状態」につながるとは考えていない。彼らは、性交渉の生命を生み出す清烈な力、ザークで結び付いた平和な暮らしなどの肯定的な面も十分に認めている。しかし、当事者の一人でもザークに不満を抱き、葛藤が生じると、ツォリは一気に人々に広がり、はげしい腰痛、頭痛、性器の痛みなどのさまざまな症状があらわれるのである。また、そのツォリと一緒に暮らしている子どもたちにも広がる。まっさきにツォリの犠牲になるのは幼い子どもたちであり、幼児は下痢や発熱などの身体的不調に見舞われ、ひどいときには死に至る。

したがって、ザークが結ばれると、ツォリによる病気の子防と治療のために、ザークに関係する大人全員と、彼らの子どもたち全員が一堂に会して、「汚れの儀礼」が行われる。人々が集まると、年長者が儀礼を執り仕切る。大人たち全員が1カ所に尿を溜め、皮膚を傷つけて血を流し、体内に潜んでいるツォリを白日の下に曝す。次に、全員の尿と血を混ぜ合わせ、さらに呪術的な薬草を混ぜ合わせる。妻あるいは夫がザークをはじめたときから、すでに関係者全員は「つながって」しまったのである。その事実を、血や尿を出し、混ぜ合わせることで顕在化させるのである。そうすると、今度はそれらが強力な「薬」に転じる。この薬を大人と子どもたち全員の傷口に塗り込む。前述の3組の夫婦の例では、彼らはすでに、8人の子どもを持っていたので、子どもたちと大人の合わせて15人が集まって「汚れの儀礼」をおこなったとい

う。ザークで4人の子どもが生まれたのは、この後のことである。

「汚れの儀礼」は、性交渉を行った男女の関係をそれぞれの配偶者や家族、親族に明らかにし公にすることに、社会的な意味がある。また、男女が再婚するときにもまったく同じ儀礼をおこなうので、「汚れの儀礼」は形式的に「シエク（結婚）」と「ザーク（婚外性関係）」を分けるものではなく、まさしく性関係を結んだことによる実質的な身体的、社会的問題を解決するための儀礼といえよう。

もう一つの結婚

「大きなザーク」は、婚姻と対立し社会的に排除されるものではなく、「もう一つの結婚」といえるだろう。また、グイ/ガナの社会は、性を媒介にした関係を特定のカップルの婚姻に囲いこみ、限定することなく、性を媒介にした結合力をより広く認めている。彼らの伝統的なシェアリングは、食物分配だけでなく、性関係の共有、性関係を公開することによる情報の共有などをも含んだものである。

ただし、今日のグイ/ガナ社会では、2組以上の夫婦による安定した性関係である「大きなザーク」はほとんど見られない。「大きなザーク」は彼らの理想ではあるが、現実には嫉妬を乗り越えてこの関係を継続することは難しいからである。

既婚女性の恋愛

今日のグイ/ガナの定住村でみられる婚外の性関係のほとんどは、既婚の女性あるいは男性が、配偶者の同意を得ずに愛人を持つものである。この、われわれの社会でいう不倫あるいは

姦通は、彼らの社会でも「盗む」「奪う」と表現して悪事と捉える傾向がある。しかし、これは、配偶者が妻あるいは夫の浮気に強硬に反対し続け、同じキャンプに住む人たちが愛人の存在を認めない場合にかぎられる。実際は、配偶者が時間とともに妻あるいは夫の愛人を仕方なく容認するという場合がほとんどである。このような実状から、既婚の男女の恋愛も広義の「ザーク」として社会的に認められている。とくに、われわれの社会と大きく異なるのは、既婚女性の婚外の性関係に比較的寛容であるという点である。

どのくらいの割合の子どもがザークで生まれたかを、55人の女性を対象に調べた(表1)。172人の子ども一人一人について、シエク（結婚）のみによるのか、ザークによるものなのかを子どもの母親本人や、まわりの人々から確かめた。これら55人の女性は、結婚歴や個人史もかなり詳しくわかっている人たちであり、また、グイ/ガナの社会ではザーク関係は「公然」のもので、調査の結果は信頼性の高いものである。ただし、母親の年齢は推定70歳をこえるものから、20歳代までばらつきがあり、子どもの生まれた年も1960年代から、1990年代まで幅がある。結果は、おおよそ4人に1人の子どもが母のザークで生まれている。これらの子どもの「生理的父親」(科学的な遺伝子を授けた父親、

表1 Zaã-ku で生まれた子ども*1

	夫妻のみから 生まれた子ども	妻の Zaã-ku で 生まれた子ども	合計
男性	64	22	86
女性	67	19	86
合計	131	41	172

*1 55人の母親から生まれた172人の子どもを対象とした。

観察者からの視点)は、母の愛人である場合が多いと推定されるが、夫である場合もありうる。

既婚女性が婚外の性関係を持って子どもが生まれた場合、その子どものペイター(社会的父親)は、その女性を「シエしている」夫ただ一人である。では、その子どもの「本当の」父親、その子どもに生を与えた男はいったい誰かという詮索が、彼らの社会ではおこなわれるのだろうか。

グイとガナの民族生殖理論

ここで、グイ/ガナの生殖に関する民族的知識を以下に述べる。彼らは、子どもは、男の水と女の水が混ざってつくられると考えている。男の水とは、精液のことである。女の水とは、性行為中に膈中に分泌される愛液および、羊水のことを指す。女性の経血は、「無用のもの」あるいは、「忌むべきもの」で、子どもの形成にはなんら関わりがないと考えられている⁽⁴⁾。継続的な性行為によって男の水は子宮の中に徐々に溜まっていき、子宮の中に水が「満たされたとき」やっと胎児の形成が始まる。彼らの生殖理論では、生物学的な受精の瞬間というものがない。つまり、デジタル的でなく、アナログ的に生命の発生が始まると考えている。また、胎児の発生が始まった後からでも、子宮に加えられた男の水は、胎児の「食べ物」として胎児の身体のもとになる。男の水は胎児の「食べ物」でもあるので、丈夫な子どもを産むために、受胎後の夫婦の性交は望ましいものとされる。

彼らは、「妊娠すると月経がなくなる」という妊娠と月経の関連については、もちろん知っている。しかし、最終月経から2ヶ月経って、ようやく「子どもの形成が始まる」と考えている。このことについて、「男の水を2ヶ月間溜め続け

て、ようやく、子宮はいっぱい満たされる」と表現する。最終月経後の2ヶ月間を、彼らは妊娠期間と見なさないの、「子どもは7ヶ月間で生まれる」という。

ザークで生まれた子どもの父親

以上の生殖理論によると、ザークでできた子どもはどのようにして誕生するのだろうか。妻に愛人がおり、夫と愛人の二人と性行為をもって子どもが生まれた場合を例にとると、彼らはこれを、「夫と愛人の二人の水が混じり合って一人の子どもを生み出す」と説明する。妻が愛人の子を妊娠しても、妊娠中に夫が妻と性交渉を持てば、夫は男の水を胎児に与えることで胎児の身体を作ることになる。また、たとえ妻の妊娠期間中に夫が完全に不在だったとしても、夫の男の水は妻の体内に蓄積されており、夫は子どもの誕生にわずかであっても寄与していると考えられている。

したがって、この例では、子どもに生を与えたジェニターは、妻の愛人でもあり、夫でもある。彼らは子どものジェニターを排他的に、一人の男性に限定しない。

もちろん、人々はザークで生まれた子どもが誰に似ているかを詮索することによって、子どものジェニターを一人に特定しようという傾向はある。しかし、「この子どもを生み出すにあたって、愛人の水は大きく、夫の水は小さかった」と人々が言うことがあるように、夫が子どものジェニターである可能性も残している。

子どもは成長すると、自分が生まれたときの母の愛人のことをごくあたりまえに知らされるようになり、彼のことを「小さなお父さん」と呼ぶこともある。しかし、母の愛人が子どもの父親として義務や権利を負うことはほとんどな

い。愛人は女性を訪ねるときは控えめに振る舞い、夫の強い反対や女性の妊娠など何か問題が生じれば、すみやかに去っていくのが「よいザーク」であると人々が考えているからだ。

男の水（精液）は胎児の食べ物だが、食べ物にも薬と毒があるように、男の水には良いものと悪いものがあるとグイ/ガナは言う。すなわち、性を媒介にした関係は、毒にも薬にもなりうるのである。夫と愛人が、互いを認め合わないとき、それぞれの食べ物は「ツォリ（汚れ）」を含んだ毒となる。その「ツォリ」によって子どもは流産で死んだり、生まれた後も重い病気に罹ったりする。また、そのツォリは夫と愛人それぞれの家族にも蔓延する。したがって、夫と愛人は、自分たちの家族を守るためにも、互いの存在を受け入れて「汚れの儀礼」をおこなうのである。

人類学における「父」

ここで、人類学・民族学における「父」の概念を、和田（1988）の分類にしたがって整理したい。

(1) 生理的父親 (physiological father)

その男性の精子が卵子を受精させ、男性と子どもの間に、明瞭な生物学的血縁関係があり、遺伝子の継承が認められる場合、その男性は子どもの「生理的父親」である。多くの社会では、次に述べるジェニターと一致する場合が多いと予測されるが、厳密には、科学的なDNA鑑定を行わない限り明確にすることはできない。

グイ/ガナ社会の生理的父親は、観察者であるわれわれが「科学的知識」をもとに、「あの男性こそが生理的父親であろう」と推定することができる。

(2) ジェニター (genitor)

その社会の創り出した生殖理論により、女性を妊娠させ、その子の父親であると、コミュニティの成員から信じられている男性。

グイ/ガナの場合、彼らの民族生殖理論により、ジェニターは複数いてもかまわない。その点で、生理的父親とジェニターは一致しない。ジェニターのことを「生物的父親」と訳すことがあるが、この訳では遺伝学的な根拠があるような誤解を受けるので、ここではジェニターをそのまま使用する。

(3) ペイター (pater)

社会的承認に基づき、その子の父親として制度的に確定される。「社会的父親」という用語をあてることもある。

グイ/ガナ社会では、子どもの母親が結婚している夫ただ一人が、ペイターに特定される。

ザークと父性

夫は、ザークで生まれた子どもも、妻と自分だけの間で生まれた子どもも、まったく分け隔てなく育てる。父親は、自分の小屋のまわりで、日常的によく子どもをあやしている。父子の接触でとくに私の印象に残っているのは、父親が子どもを抱いたり肩にのせたり、自分と一緒にロバに乗せたりして、外出の時に連れ歩く姿をしばしば見かけたことである。訪問先で、子どもは父親の膝にすわって、父に供された紅茶などに手を伸ばす。子どもが男の子なら、7～8歳ごろから父親は罫獵を教える。また、父親は、どの子にも平等に、肉や食べ物を分け与える。

グイ/ガナの男性が過去のザークをめぐる争いをふりかえって語るときの淡々とした様子、また、妻のザークでできた子どもも分け隔てな

く可愛がり、細やかな愛情を注ぐ態度に、しばしば、われわれ観察者たちは心を打たれ、彼らの寛容さを記述してきた(例えば、菅原, 1993, p. 277)。しかし、それを菅原が言及したように「真の利他主義」へと方向づける社会—心理的な要因」(菅原, 1998, p. 197)に帰することができるとは思わない。なぜなら、「彼はその子の生理的父親でないにもかかわらず、子どもを扶養している。これこそが真の利他主義⁵⁾だ」と判断するのは観察者の独善的な解釈によるものである。彼ら自身は、自分がジェニターであるという民族知に支えられて行動しているからである。

私は、グイ/ガナの男たち数人に、「妻のザークでできた子どもについてどう思うか」と尋ねたことある。どの答えも「妻のザークには怒りを感じるが、子どもはザークとは関係ない。なぜなら、子どもはどの子も明らかにおれの子なのだから。」という内容のものだった。男性がこのように父としての確信を持つのは、ツォリのところで述べたように、「ツォリへと変容するような「つながり物質」で、すでに父と子は結びついている」という意識によるものであろう。

さらに、あるグイの男が、「妻のザークに怒りを感じても、妻を許して子ども(胎児)に男の水を与えることは、その子どもが生まれてから食べ物をやって育てることと同じだ」と、語ったことがある。これは、性行為と子どもの扶養とが相同の関係にあり、「男の水/性交」と「食べ物/扶養」が対応することを明言している。このことから、父と子の関係を、妻を介さない直接的な二者間の関係として捉えなおそうとしていることがわかる。

結 論

グイ/ガナ社会に見られるザーク(婚外の性関係)は、個人の持つ恋愛感情を基本にして築かれる関係でありながら、最終的にその個人的関係を社会化している点に特徴がある。また、このように社会的に容認されているが、完全に制度化されているわけでもない。つまり、ザークは個人と社会の中間に位置する。

婚姻に関わる諸制度は、「性」を社会的なものに還元しようという社会的要請によるものである。とくに、子どもの出自を決定するために、男性よりも女性の行動に制約を課す社会は多い。しかし、グイ/ガナの人々は、既婚女性の性をコントロールすることを放棄している。このような社会の中で、夫は妻のザークという事実を人々と共有し容認する一方で、生まれてきた子どもと自分との直接的なつながりを再構築しているのである。夫の「父性=父であること」は、具体的な日常生活での父と子のかかわり合いのなかで発揮され、彼らはこの実態をなによりも重要視している。これは、「すでに出来上がっている関係を容認しなければ、関係者全体にツォリ(汚れ)が生じる」という彼らの疾病観とも合い通じている。さらに、ジェニターを一人に限定しない彼らの民族生殖理論が、父と子の結びつきを理念的に支えているといえよう。

グイ/ガナの社会では親による子どもの扶養の負担は小さい。子どもは早くから両親の小屋を出て、ある程度自活しながら人々と暮らすようになる。また、子どもたちには、親の手伝いなど、労働力の期待はほとんどされていない(Draper, 1976)。父親は「威厳」でもって子どもたちに命令する必要もなく、その分だけ父親は、限られた期間の子育てを純粋な「楽しみ」

「喜び」と捉えているように見受けられた。

使うのは間違いである。

註

- (1) 調査対象のセントラル・ブッシュマンは、グイとガナの二つの言語集団からなる。彼らの言語の違いは方言程度で、彼らどうしは十分に言葉が通じ合い、また、通婚も互いにし合う。
- (2) 本研究の資料は、1994年度および1995年度に、ボツワナ共和国のカデ地区で、グイとガナの人々を対象に集中的に行ったインタビューがもとになっている。また、1997年度に短期間おこなった現地調査によって資料を補足した。
本研究のもとになっている資料の多くは、文部省科学研究費(国際学術研究)「変貌するカラハリ狩猟採集民サン人の生態と社会に関する人類学的研究」(代表者・菅原和孝・京都大学教授)、「カラハリ砂漠とその植生移行帯における民族多様性に関する生態人類学的研究」(代表者・田中二郎・京都大学教授)の交付を受けて収集された。また、本稿は、国際日本文化研究センターでの共同研究会(「通婚圏、配偶者選択および性淘汰によるヒトの進化」研究代表者・赤澤威・国際日本文化研究センター教授)での発表に加筆訂正したものである。
- (3) エボック・メイキングとしては、天然痘が流行した1951年などがあげられる。グイとガナの年代編成については、大崎(1996)の論文に詳しい。
- (4) 女性の経血と男性の精液が混ざって子どもができると考える民族は多い。クンもそのように考えており(Shostak, 1983), ケニアの半農半牧民チャムスも受胎における経血の働きを重要視する(河合, 1994)。
- (5) もちろん、利他主義という用語は社会生物学からきたものであり、個体が自分の行動の意味を意識していることの有無は問題にされない。しかし、世に氾濫する「社会生物学的なたとえ」の例に漏れず、この用語をある文化の人たちの寛容な行動の説明に

引用文献

- Draper, P. 1976. Social and Economic Constraints on Child Life among the !Kung, In (R. B. Lee & I. DeVore eds.) *Kalahari Hunter-Gatherers: Studies of the !Kung San and Their Neighbors*, pp. 199-217, Harvard University Press, Cambridge.
- Howell, N. 1979. *Demography of the Dobe !Kung*, Academic Press, New York.
- 今村 薫 1998「グイ・ブッシュマンにおける儀礼と治療」名古屋学院大学論集(人文・自然科学編) 34-2, 43-83頁
- 河合香史 1994「チャムスの民俗生殖理論と性——欺かれる女たち」高畑由起夫編『性の人類学——サルとヒトの接点を求めて』世界思想社
- Marshall, L. 1976. *The !Kung of Nyae Nyae*, Harvard University Press, London.
- 大崎雅一 1996「歴史的観点から見た | Gui と || Gana ブッシュマンの現状——セントラル・カラハリの事例より」『民族学研究』61(2): 263-276
- 佐藤俊 1992『レンディール——北ケニアのラクダ遊牧民』弘文堂
- Shostak, M. 1983 (1981). *Nisa: The Life and Words of a !Kung Woman*, Vintage Books, New York.
- 菅原和孝 1993『身体の人類学』河出書房新社
- 菅原和孝 1998『語る身体の民族誌——ブッシュマンの生活世界(1)』京都大学学術出版会
- Tanaka, J. 1989. Social integration of the san society from the viewpoint of sexual relationships, *African Study Monographs*, 9: 153-165.
- 和田正平 1988『性と結婚の民族学』同朋舎出版